



「空中小姐」ノート

—王朔へのひとつのアプローチ

西野由希子

〔一〕

「空中小姐（スチュワーデス）」は王朔の初期のヒット作である。彼の処女作は1978年《解放軍文芸》11期に載った「等待」で、その後「海鷗的故事」（《解放軍文芸》82年8期）、「長長的魚線」（《膠東文学》84年8期）が発表されているが、この三作は未だ習作といった感が強いのに対し、「空中小姐」は作者の意識からも（これについては後でふれたい）、《当代》（84年2期）というメジャーな文芸誌に発表されたという意味でも、実質的に王朔の文壇デビュー作だったと言える。

王朔は93年までに30篇余りの小説を発表、若い人を中心に多くの読者を得ているが、同時に、彼の原作・脚本でたくさんのテレビドラマや映画が作られ、そのヒットによっても名を挙げた。特に88年には4本の映画が公開されて流行し、“王朔熱”“王朔現象”という言葉も生まれたが、“王朔現象”とは、そのような小説・テレビドラマ・映画の大流行に、彼の作品の独特のスタイルや発表の方法、王朔を実質的なリーダーとする“海馬集団”^{*1}の活動、王朔に対する反発やそこから生じる波紋、なども含めた、彼をめぐる状況全てを指すものだろう。私は、“王朔現象”にも、彼の作品にも、興味を抱いている。本稿では、「空中小姐」をテキストに王朔の作品の読解を試み、併せて幾つかの問題を提起したい。

〔二〕

俺が王眉と知り合ったとき、彼女は13歳、俺は20歳だった。当時、俺は海軍で掃海艇の三七砲の砲手をしていて。彼女はサ、夏休みでおばあさんの家に来てる中学生だった。^{*2}

「空中小姐」はそんなふうが始まる。憧れと尊敬の対象である若い海軍軍人の「俺」と王眉は出会い、文通だけの五年が経って「俺」は海軍を退役する。

定職に就かず、軍からもらった退役金で各地を見て回るうちに、「俺」は王眉のいる都市に来た。「一番最近の手紙に、彼女は書いてきた。高校を卒業してスチュワーデスになった、って。」

以上が一章で、二章からは再会した二人の恋愛が「俺」の側から語られるのだが、その恋愛がどんな展開を見せるのかということ、実は作者は主人公二人の設定によって仕組んでいる。

まず、見かけ一男は鏡を見て自ら気にするような“胖子”、女は長身でおそらく美人。

職業一男は海軍軍人という海の仕事
を辞めて今は無職。仕事につきたい気
はあるのだが、満足できる仕事でなけ
ればいやだという誇りがあり、不本意
でありながらも敢えて定職に就かずに
ぶらぶらしている。王眉はスチュワー
デスという、華やかで、一般の人々に
とって憧れの職業に就いた。こちらは
空の仕事。「飛ぶことが好き」で、優
秀乗務員に選ばれるほど熱心であり、
自分の仕事に誇りを持っている。

彼女が彼に英語のジョークを話そう
とする場面がある。男は英語じゃわか
らないと訳してもらおう。職業から言っ
ても、二人は表面上は知識人とそうで
ない者という書き方をされている。

性格一男は世の中に対して斜に構え
た態度を見せる。彼は軍人として誇り

[男]	[女]
25才	18才
北京	南方（広州）
胖	美人
軍人＝海	中学生
無職	空中小姐＝空
非知識人	知識人
大人	子供っぽさ
疲れ	純真さ、幼さ
斜めに見る	真っすぐ
卑屈さ→	←憧れ
英雄（で あろうとする） →なれない	非英雄＝普通さ →本当の英雄 に
名前不明	王眉（＝完美

を持っていたのだが、退役してみると、社会人としては出遅れていて武装警察
など限られた職場しか選びようがないことを知る。軍のほうにも新しい教育を
受けた若い新人たちがはいっている。行き場のない思い。それがますます彼の
性格ををねじれさせる。男について何度も「没人用的胖子」「没用的人」「廢
物」といった表現が使われる。男はある時はそう言われることに抵抗しつつ、
時には自分でもそう思ってしまう卑屈さを抱えている。一方、王眉の性格は「

子供のように純真」と形容される。幼くて、純真で、真っすぐな性格。恋愛についても子供っぽい、一途である。

以上のように主人公の二人はさまざまな面で対照的とも言えるような描かれ方をしている。出身や職業、性格や人生観の異なる二人。「英雄」という言葉によっても、彼らの“違い”をはっきりさせることができる。男は「英雄」であった過去を持ち、現在もできれば「英雄」であろうとする、が、結局は「英雄」になることはできない。女はむしろ非「英雄」で、その普通さが彼女のよさでもあるのだが、やがて死によって本当の「英雄」となる。「空中小姐」は英雄になった女と英雄になれなかった男との物語なのである。

さて、このような二人のすれ違う心、かみあわない恋愛を、王朔は、すれ違う言葉、かみあわない会話によって表現する。

「寒いって言うからサ、俺は着てるものみんな脱いで貸しただろ」「服を貸してほしかったんじゃないの。寒いって言ったのは、何か暖かい言葉を聞きたかったのよ」

「いま私の一番の願いが何かわかる？」「なに？」「死ぬときがきたら最後に貴方を見たい…」「ばかだな、その頃俺はトシ取っちゃって、じいさんになってるさ。そのときに見たいのは子供の顔なんじゃない。」「ちがうちがう」

一見、恋人どうしのたわいない会話のようにも見える。が、二人の言葉の軸がずれていることに読者は気付くはずである。二人の会話はいつも真っすぐにぶつかり合わず、肝心なところではずしている。ふざけ合っているようにも取れるが、そのずれが心のずれであり、恋愛の行方を暗示するものであることは明らかである。

二人は、王眉がフライトで北京に来るたびに男の家に遊びに寄るという形できあいはじめる。やがて王眉が杭州の保養所で休暇を過ごすことになり、男もそこへ行くのだが、二人の間はぎくしゃくしていき、別れをむかえることになる。その決定的な要因も言葉にある。かつて王眉が「もし私が事故で怪我したら、それでも私がいる？」と聞いたとき、男は「俺が一生おまえを養ってやるよ」と答え、その言葉で二人の均衡が保たれた。しかし、いつまでも仕事に就かない男をそれでも愛していると思う王眉は、自分が「貴方を養ってあげる」と言ってしまふ。それが何でもしてあげたいという、相手を思っただけの言葉だったにしても、男は受け入れるわけにいかない。もしそうすると、二人の間で

装ってきた英雄と非英雄という関係が崩れるからである。こうして一つの言葉によって二人は別れる。王朔は、言葉の“ずれ”で人物の心理や状況を見せ、言葉を別れの原因にしている。そして、王眉の死という悲劇も言葉で準備されている。

〔三〕

王眉と別れた後、男はやっと仕事に就く。田舎を回って薬を売って歩く仕事である*³。王眉らしき女性を見かけても人違いだと自分に言い聞かせ、彼女と全く連絡が途絶えたまま、月日がたったある日、突然に飛行機事故で王眉が死んだことを知るのである*⁴。

小説は早くにいくつか、この王眉の死の伏線を用意してあった。他の飛行機事故について王眉が語る場面もあったし、「死ぬときがきたら最後に貴方を見たい」という前述の王眉の言葉も主人公たちにとっての意味とは別に、読者に不吉な予感を与える効果があった。そして、彼女の死を知った男は、最後に杭州で別れたとき、王眉が言いたそうにしていた、自分に向けての最後の言葉を知るため、王眉の友人たちをたずねる。

男が、王眉の先輩格のスチュワーデス、親友のスチュワーデス、そして王眉が最後に付き合い結婚の約束もしていたという軍人・沈同平の三人を順々に訪ねて、王眉のその後を聞き出していくあたりは、まるで推理小説の謎解きのようであり、探偵が真相を追い詰めていくような緊迫感とおもしろさがある。三人はそれぞれの性格とそれぞれの王眉との関係から、彼女について異なった語り方をする。男と別れた後について、先輩は「彼女は泣かなかったわ」と言い切るのに、親友は「彼女はこっそり泣いていた」と話す。この三人の口を通して男（と読者）はその後の王眉について、多面的に知ることになるし、より真実に一男にとっての真実に、近付いていく。彼は王眉が死んだ今になって自分がどんなに彼女を愛していたかに気づき、必死に彼女から自分へのメッセージを知ろうとする。それは自分を愛しているという内容だったはずだ、そうでなければならぬと決め込んでいる。だから先輩と親友のスチュワーデスから、彼女は恋人の沈同平を愛していたし、二人は本当に似合いのカップルだったから、死ぬときも彼を思いながら死んだはずだと言われても納得しない*⁵。沈同平に会って遂に、男は「彼女はあなたを最後まで愛していましたよ」と言ってもらふ。そして、“言葉以外の方法”で彼女がそれを伝えにくるでしょうと予

告される。果たして、その夜の夢のなかに彼女がやって来る。

最終章。男は飛行機の中で王眉に面影の似たスチュワーデスを見る。「英雄ですね」と言う隣席の客に、男は言う。「普通の女の子です」と。

こうして全ての答えが与えられる。言葉のすれ違いを続けてきた二人は、王眉の死後、言葉を交わすことができない状態になってやっと一体になる。「英雄」という言葉を中心にすれ違いのベクトルを示していた二人がここで調和して、物語は完結する。

最後の部分、謎解きめいた趣向も凝らして読者を厭きさせない作者王朔の腕はストーリーテラーとしてすぐれたものである。これが、最も初期の「空中小姐」で発揮されていることに驚く。

〔四〕

さて、王朔の作品の特徴の一つは、物語の中にエンターテイメントの要素が盛り込まれていることである。王朔は『我是王朔』*6で「空中小姐」について「オレはなにが売れるのか、わかっていた。それで『空中小姐』というタイトルを選んだ」「このタイトル、スチュワーデスという職業は、読者にも編集者にも一種の神秘感を与えるものだし、女の子を書いたものはあたるんだ」と語っている。言葉どおりならば、「売れる」という理由で「空中小姐」というタイトルをまず決めて、それから作品を書いたということになる。作品を売り、作家として商売していこうと考えたわけで、ある意味では非常に自覚的に作品を書いたことになり、この文章の冒頭で「空中小姐」を「実質的に王朔のデビュー作」と言ったのはそういう意味であるが、同時に、このようなスタンスは中国の文学界では特殊なものでもあった。

それにしても「スチュワーデス」を選んだところに王朔のセンスの鋭さがある。スチュワーデスという存在は人々の好奇心を集めるものである*7。作家としてそこに目を付けた王朔は、作品の中にスチュワーデスの“生態”をうまくはさみこみ、読者にサービスしているのである。

「空の英雄」であり、花形職業であるスチュワーデスたちの生活はどんなものか。どのような勤務形態で、どんな暮らしぶりなのか。新聞の紙型を運ぶといった特殊なものを含む仕事の内容、「李谷一が乗ってきたとき、わざと朱蓬博の歌をかけた*8」といった裏話、フライト先でおいしいものを手に入れたり恋人に会ったりするスチュワーデスの日常。王朔自身がスチュワーデスと同棲

していたことがあるというのは真実かどうか分からないが、一般の人の知らない、しかし知りたい情報が、この作品には書き込まれている。このような娯楽の要素も「空中小姐」の特徴なのである。

〔五〕

以上のように「空中小姐」を読んできた。「主人公の設定」、「言葉」、「エンターテインメントの要素」などとキーワードを挙げてきたつもりだが、王朔のその後の創作を追っていったとき、「空中小姐」が王朔の作品の祖型となっていること、つまり、その後王朔が展開していったものを「空中小姐」が既に含んでいたことがわかる。

主人公の設定。王朔の作品を通してみると、男性の主人公にはかなり共通した性格が見られる。①非知識人であること。そのためにコンプレックスを抱いているが、反面、雑草的な強さがあり、知識人に対する反発や軽蔑を持つ。②職業は無職か、それに近い自由業、流氓といわれるような遊び人。③人生を楽しみ、享楽を第一として生活している。深刻なものと向かい合っても、最後にかわす。④既成の道徳や社会通念からはずれている。これらは互いに関連しあったものであり、こういった設定は「空中小姐」の男とも重なる。このような主人公は、王朔自身をかなり反映しているという面も否定できないが、作品を書いていく中で次々に発展していったとも言えるかもしれない。また逆に王眉のような女性の主人公の形象がその後、書き続けられなかったことも、王朔を考える一つのポイントとして指摘しておきたい。

違うタイプの男女の恋。例えば「愛你没商量」ではタクシーの運転手と新進女優との恋愛が描かれた。これも、違うタイプの二人が惹かれあっていくという設定であり、また劇団という特殊な世界を舞台にしていた点でも、別の「空中小姐」物語である。

言葉。「空中小姐」で物語が「言葉」によって進められていることは先に示したが、この作品以降、王朔の作品はより言葉に特徴が出てくる。「話し言葉」で書かれたような文体、流行語や若者言葉・北京の若い遊び人たちの言葉の使用である。北京で、おしゃべりすることを「侃」というが、王朔の文章は「侃」だと言われる。私が北京で聞いてみた人たちも、「言葉がおもしろい」「読みやすい」と言っていたが、かなり特殊な隠語なども使っていて、人によってはわからなかったりするようだった。王朔は、雑誌《エスクァイア》のイン

デビューに対し、「オレは文章語を使って小説を書けないんだ。自分がよく知ってる、使ってる言葉でしかかけない。それが別に流氓の言葉だとはおもわない。」*9と語っているが、「空中小姐」では効果的だった「言葉」によって心のずれを示すという手法は、その後は総じて言葉遊びに近い、もっと砕けたものに変化していったと言える。

この他、現代風俗を描くうまさや「頑主」「一点正経没有」等につながり、若者の遊びや生態、世の中への反発といった若者意識から作家や文壇への挑戦までが、一見軽いタッチで描かれる。また、喜劇的な部分が結実したのが「編集部的故事」等の作品であるし、エンターテインメントの要素もそれぞれに盛り込まれている。

「空中小姐」は、以上のようにその後の作品の祖型と言える象徴的な作品だが、純真で真っすぐな王眉の設定ゆえか、作者王朔がまだそうだったのか、後の作品の一部に感じるあざとさがない*10。しかし、そのような作品の性格や質から離れたところで、現在の王朔はさまざまな問題をつきつけてくる。

〔六〕

王朔の活動が日本でも知られるようになったのは、88、9年ころからだろう。冒頭にも触れたが、中国では88年に彼の原作の映画が4本公開され、この年は“王朔年”と言われたり、“王朔熱”という言葉が生まれたりした。その後も作品が発表されるとよく売れ、読まれ、テレビや映画の作品が作られて、またそれがヒットするといったブームが続く。私が北京に留学したのは92年秋、テレビドラマ「編集部的故事」が大好評を博してから半年程あとで、街の本屋には「王朔文集」四巻本*11が並んでいた。知り合った北京大学の学生たちに「王朔は好き？」と聞くと、ほとんどの人が好きだと言う。しかし「どこがいいの？」と尋ねると、「おもしろいから」「ひまつぶしになるんだ」といった答え。読みやすくて、ストーリーがおもしろい。感覚が近い。ということのようだったが、日本でならば、内容は別として吉本ばななや赤川次郎といった作家たちの作品、或いは流行のマンガに対するリアクションに似ているように思った。

王朔の一つの特徴は彼が自らプロデュースする作家だということであろう。「空中小姐」を書くにあたって彼は「売れる」という商業的な意識からこのタイトルを選んだと言っているが、それは作品を「商品」と見ることができ、い

かに「売るか」という戦略を持っていたということである。始めから自分の小説を一そして文学を一「神聖化」しない態度をとったのは王朔の非常な新しさであった。そしてどこまでが本人の意図によるのか不明な点もあるものの、書くところから発表の方法まで、彼のやり方はそれまでの中国になかった斬新なもので、メディアミックスの先駆けという面を持っていたと言える。

例えば「王朔文集」は旺忘望という人が装丁を担当し、表紙上部に「封面設計：旺忘望」と明記されている。この表紙には全体に大きく王朔自身の顔写真が使われており、その斬新さにより、旺忘望は一躍装丁家として名を挙げ、関係の賞も受賞した^{*12}。本の装丁を重視し、特定の装丁家（以前にはこの職業の人は存在したのだろうか？）を起用する。このような出版戦略は、日本などではもはや当然のことだが、中国ではこれまでなかったことであろう。また、「愛你沒商量」は《北京晩報》での新聞連載と小説単行本の出版、北京電視台でのドラマ放映が同時期に進行するという相乗効果によって、より大きな反響を呼んだ、と言える。このような各種のメディアを利用して宣伝効果をあげる戦略も、メディア先進国ではさまざまにしかも巧妙に仕掛けられていることだが、王朔の場合は本人のアイデアに拠るものか、誰か他の人なのか、最先端の方法であり、またそれが一々成功しているのである。

しかし事実として大ヒットしていたにもかかわらず、中国の文壇・文学界は王朔という作家を始め無視していたようである。その理由は、大きく二つあるだろうと思う。一つは、王朔の側の作家・文壇に対する態度に起因する。王朔は常に作家や文壇、知識人への反抗と擲論を抱いており、それを隠そうとしない。「空中小姐」にも「小説でも書こうかな」と言って男が王眉の気を引く場面があるが、「頑主」等では更にあからさまに文壇を皮肉っており、それが彼の作家としての現実の方法であるために、作家や評論家には余計に不愉快に感じられたはずである。王朔に対して無視したり、低い評価を与えたりするときこれが理由になっていたことは間違いない。

もう一つの理由は、いかに評価したらよいのか、方法も含めて、評論する者たちがとまどっていることがあると思う。最近あいついで刊行された王朔を評論する出版物^{*13}を見てみると、その一部は、“王朔熱”に乗り、「王朔」の名を使って稼ごうという便乗組である（しかしそれもまた王朔の名前の強さを物語る）。他のものは、王朔について“現象”として評価する態度はあるものの、今までの作家になかった商業的・戦略的創作という面と作品の本質と

をどうとらえ、どう評価するか、というところで苦労しているようだ。王朔の作品は、これまで文学批評の場で用いられてきた方法で評論すると落ちてしまう部分を持っていると、私には感じられる。その部分をどのような方法によって評価したらいいのかという問題が、王朔からさしだされているのではないだろうか。例えば日本では、映画を中心とする映像の分野の評論、或いはマンガの評論で、いろいろな試みがなされているのを見るが、王朔の作品についても従来の文学評論の枠ではうまく捉えきれないのだから、そういう別の方法も参考にし、ふさわしいやり方で論評していくべきではないかと私は考えている。これは自分に対する問題提起でもある。

この他、いわゆる「純文学」と「通俗文学」という概念の問題、作家と商業主義の問題、「話し言葉」と文体の問題など、王朔の登場によって表に出てきた問題は多いが、私としては、“海馬集団”の今後の動向や、王朔自身がどのような創作活動を続けていくのか、という点にも興味がある。それらを見ていくこと、そうしながら王朔について、王朔が提示してくる問題について、また彼の作品について、考えていくことが、今後の課題であると思っている。

前述の雑誌「エスクァイア」の記事で、「ずっと創作を続けていくの？」という問いに対して、王朔は、

「いや。著述は、当初、生活を愉快にするための手段だったのに、いつからか、自分がいい作家だと証明するため常に書き続けるはめになった、疲れる。」「文字を綴る作業自体には大した意味はない。もちろん、いまもモチーフや衝動は次々浮かんで来る。一度書いた人間はなかなか書かずには済まない。ただ、オレは小説にすべてを投入して人生を送りたくないし名声だっとうでもいい。」

と答えているのだが、さて、どうなるのだろうか。

文学報 1994. 1. 13

加来騰公司状告马未都、王朔、葛小剛等有結果

《广告人·寒冷克星》一案终审结案

公司出钱“买”宣传 反遭名誉受损

作家当庭赔礼道歉 又怨没自由

本报讯 据《北京青年报》记者陈静报道，历时近一年的加来腾公司状告王朔、苏晋、马未都等侵害名誉权一案本月1日终审结案。《广告人》一书中《寒冷克星》的实际作者、海鸟影视创作室的马未都和海鸟影视创作室的代表葛小刚承认他们的作品在客观上给原告造成一定不良影响，分别当庭向原告赔礼道歉。

1993年1月，加来腾公司出资50万元，委托久广广告公司请海鸟影视创作室在电视连续剧《广告人》的撰稿中加入一篇宣传该公司产品寒冷克星的内容。但在1993年2月《广告人》出版发行后，加来腾公司以《寒冷克星》一书中个别段落，请有损企业形象为由，于1993年4月向朝阳区法院起诉《广告人》的署名作者

王朔、苏晋、魏人及出版单位人民中国出版社。

原告加来腾公司的李磊小姐说：“我们花钱请‘海鸟’宣传公司，他们却在作品中把我们的总经理描绘成一个秃头卷毛、口戴黄牙、整日只知‘喇嘛’的小丑形象，虽然公司并没有代理这一职务，但在客观上却给读者造成本公司乌七八糟的印象。”《寒冷克

星》的作者马未都却认为：“这些描写纯属文学范畴。如果真白地费扬‘寒冷克星’如何功效非凡，只能令读者对此反感。通晓整篇文章，还是为该产品唱赞歌的，至于那些形容词汇只不过想给文章增点儿色彩。”

经过法院四次开庭调查了解，认为总经理代理虽然

不能代表企业，但他的行为后果却要由企业承担。对总经理代理的描写确实从客观上损害企业形象，故法院判令马未都和海鸟影视创作室向原告道歉。原告也同意不再追究只署名的王朔、苏晋、魏人只负责出版不负责审稿的人民中国出版社的责任。马未都当庭后愤愤地向记者说：“钱钱就没有文学创作自由了？真应该制

定一部作者权益法。”

……原告的辩护律师彭宇军开庭后对记者说：“民法101条规定，公民、法人享有名誉权，公民的人格尊严受法律保护，禁止用侮辱、诽谤等方式损害公民、法人的名誉，虽然只是短短的一句话，但能真正理解它的并不多。被告就是在知道这条法律的基础上触犯了这条法律。”

*註

- 1) “海馬集団”は、一種の文芸プロダクション的グループで、王朔以下、莫言・史鉄生・蘇童等30数名が名を連ねている。グループとして引き受けた仕事を、相談の上で分担し、利益を分け合うという仕組みも持っているようだが、それぞれの仕事を制限しないなど緩やかな組織であるらしいし、また、最近は問題も起きはじめていると言う。小説「一点正経没有」にグループ結成時の様子をモデルにしていると思われる場面がある。“海馬集団”の構成員・グループの仕組みなどは釜屋修先生に教えていただいた。
- 2) 以下、「空中小姐」のテキストは、『王朔文集』1・純情巻（華藝出版社1992年10月）に拠る。
- 3) 作品のこの部分は多分に自身の経験に拠ると思われる（略年譜参照）。
- 4) 王朔の作品が多く読者を獲得する理由の一つは、このような劇的なストーリー展開にあるだろう。女主人公が突然事故で死ぬというこの場面展開から受ける印象は、「メロドラマ」、もっと言えばいわゆる「昼メロ」のあの感じに近い。こういう感じは（よい悪いという判断は別にして）「通俗性」と呼ばれるものだろう。
- 5) 一読者である私から見ると、このあたりの男の気持ち、そして態度には共感できず、今頃そう思うくらいならなぜもっと早くに彼女の気持ちをわかってあげられなかったのよ、そんな愛は結局身勝手な愛でしょう、と言ってやりたくなる。しかし、男がそれほど必死になる姿は、以前に彼女が「死ぬときがきたら最後に貴方を見たい」と言ったことを思い出させ、違うタイプだったからこそ強く惹かれあっていた二人には、他人にわからない強い感情・強い絆があったのだろうと逆に納得させられる面もある。恋愛のせつなさ。悲しさ。
- 6) 『我是王朔』逸明編 1992年6月 国際文化出版公司。この本の前半には編者と王朔の対談が収められており、自身の経歴や作品について王朔が答えている。
- 7) 日本のテレビドラマでもかつて「スチュワーズ物語」というのが大ヒットした。作家田中康夫は一時スチュワーズの裏話に詳しいというのを売りにして雑誌のコラムなどを書いていたし、雑誌《噂の真相》のスッチー（と言うのである）のコーナーや若ノ花の婚約者に至るまで、一般人はスチュワーズの話題が好きである。もちろん、中国と日本の状況は異なっており、

「国家的重要職務」であったスチュワーデスに対して、「空中小姐」発表の頃の中国庶民の“好奇心度”は、日本で言えば60年代のそれに当たるのではないだろうか。

- 8) 李谷一と朱蓬博は、ともに中国でよく知られた歌手。
- 9) 《Esquire エスクァイア日本版》94年1月号 エスクァイアマガジンジャパン。この号は「北京特集」で、歌手崔健や若手芸術家たちと並べて王朔を取り上げ、「北京の村上春樹・王朔登場」として、インタビュー記事と抄訳を載せている。これ以外に最近日本で目にした王朔に関する紹介・論評に、加藤三由紀氏「『俺が王朔だ』—スター作家のポートレート」（《ユリイカ》93年3月）、石井明氏「変わりゆく北京」（《学士会会報》93年Ⅱ, No 7 99）、山腰旦氏「中国文芸界の動向」（《民主文学》94年3月）等がある。
- 10) 小稿で「空中小姐」を取り上げたのは、私が王朔の作品の中でこの「空中小姐」が最も好きだからである。本稿での論とは別に、私は王眉という女性に感じるところが多く、この小説を読みながら思うことは多かった。
- 11) 華藝出版社 1992年10月。註2のように、本稿もこれを使用した。
- 12) 現在、競合する装丁家が少ないこともあり、各方面からひっぱりだこ、超売れっ子だそうである。
- 13) 主なものを以下に挙げる。『我是王朔』（註6参照）、『王朔批判』（張徳祥・金恵敏著 1993年2月 社会科学出版社）、『王朔批判—我是流 我怕誰』（曉声編 1993年3月 書海出版社）、『侃侃王朔』（張毅編 1993年3月 華夏出版社）、『王朔 大師還是痞子』（高波編 1993年4月 燕山出版社）、『王朔再批判』（蕭元著 1993年6月 湖南出版社）。

—1994年2月—

文 藝 報 93. 11. 27

陝西設立“路遥青年文学奖”

本报讯 以30万元的资金作为后盾的“路遥青年文学奖”在西安宣告设立。

路遥生前痴迷于文学事业，在艰苦的环境中，呕心沥血，勤奋创作，直至献出了年轻的生命。他创作的《平凡的世界》、《人生》、《惊心动魄的一幕》等300多万字的小说，在

读者中有很大的影响。

在陕西省作家协会支持下，“路遥青年文学奖”的基金由女友杂志社和西安市惠友文化科技开发公司等单位筹资捐赠，采用征文大赛的形式，每年奖励40岁以下的青年作家、作者当年创作的小说、散文、诗歌等文学力作。

王朔に関する略年譜

- ①この略年譜は、王朔の経歴と彼の作品（小説、テレビドラマ、映画等）について、試みに作ったものである。
- ②『我是王朔』（逸明編 1992年6月 国際文化出版公司）を資料の中心とし、その他、93年12月現在の情報をなるべく盛り込んでみた。
- ③小説名は太字、テレビ・映画の作品名は斜体字とする

- 58年 南京で生まれ、北京市東四で育つ。父は解放軍政治学院の教員、母は医者。
- 77 高校を卒業。人民解放軍に入隊。操舵兵となる訓練を受けたのち、青島で衛生兵の勉強をして船に乗り組む。
- 78 軍関係の大学を受験するが、失敗。配置替えで、軍の倉庫の衛生員となる。
処女作「等待」を《解放軍文芸》11期に発表。
- 80 解放軍文芸社に所属したあと、退役。北京医薬会社に勤め、薬品の販売をする。
- 82 「海鷗的故事」《解放軍文芸》8期。
- 84 北京医薬会社を退職。この夏、北京舞蹈学院の沈旭佳と知り合う。
「長長的魚線」《膠東文学》8期。
「空中小姐」《当代》2期。
テレビドラマ「空中小姐」（脚本を担当）放映。
- 85 「浮出海面」《当代》6期（沈旭佳との合作）。
- 86 「一半是火焰，一半是海水」《啄木鳥》2期。
「橡皮人」《青年文学》11・12期。
- 87 沈旭佳と結婚。翌年、長女誕生。
「枉然不供」《啄木鳥》1期。
「人莫与毒」《啄木鳥》4期。
「頑主」《收穫》6期。
映画「天使与魔鬼」珠江電影制片廠。
- 88 「痴人」《芒種》4期。
「人名危浅」《藍盾》。

「無情的雨夜」《通俗小説報》。

「毒手」《警壇風雲》。

「我是狼」《熱點文學》。

「各執一詞」《文學故事報》。

映画「頑主（原作：頑主、一点正經没有）」葛優、潘虹他出演。峨嵋電影制片廠。

映画「輪迴（原作：浮出海面）」監督黃建新、主演雷漢、西安電影制片廠。

映画「一半是火焰一半是海水」監督夏剛、北京電影制片廠。

映画「大喘氣（原作：橡皮人、邦題：失われた青春）」監督葉大鷹、主演謝園。王朔は脚本執筆に参加。深圳電影制片廠。

この年は“王朔年”と言われたりする。

8 9 王朔をリーダーとする「中国戰略与管理研究会 海馬影視創作室」（“海馬集團”）設立。

「一点正經没有」《中国作家》4期。

「玩的就是心跳」長篇／單行本 作家出版社。

「千万別把我当人」《鐘山》4・5・6期。

「永失我愛」《当代》6期。

9 0 「給我頂住」《花城》6期。

秋、テレビドラマ「渴望」が北京電視台で放映。李曉明、鄭万隆らが脚本。王朔も構想執筆に参加した。中国のテレビドラマとしては、空前のヒットとなる。“海馬集團”の最初の成功作である。

9 1 テレビドラマ「編輯部的故事」（王朔、馮小剛の共同脚本）。「渴望」で視聴者を泣かせたから、今度は笑いだと、喜劇に取り組んだという。これも大好評を博す。

「我是你爸爸」《收穫》2期。

「修改後發表」《小説家》4期。

「無人喝彩」《当代》4期。

「誰比誰傻多少」《花城》5期。

「動物狂猛」《收穫》 期。

映画「青春無悔」西安電影制片廠。

映画「神秘夫妻」北京電影制片廠。

- 9 2 「不是一个俗人」《收穫》2期。
「懵然無知」《都市文学》。
「許斧」《上海文学》4期。
「過把癮是死」《小説界》4期。
「劉慧芳」《鍾山》4期。テレビドラマ「渴望」の続編として書かれたもの。

「王朔文集」4巻、華芸出版社。

テレビドラマ「愛你没商量」（王海鸰と共同脚本）。11月北京電視台で放映。主演謝園、宋丹丹。同じ時間帯に裏でやはり話題のテレビドラマ「皇城根」を放映したが、「愛你没商量」のほうが評判がよかった。

小説「愛你没商量」10月～12月〈北京晚報〉に連載。12月、華芸出版社より出版。

- 9 3 2月「広告人」（長篇／単行本）人民中国出版社より出版。内容や契約に関して、スポンサー・出版社・著者の間で裁判になっている。作者は王朔・蘇雷・魏人となっているが、実は王朔は執筆に加わっていないため、“海馬集団”内部の問題ともなっている。

社会科学出版社より「海馬文学叢書」の刊行はじまる。2月に「青春無悔 王朔影視作品集」。以後、「海馬歌舞厅 王朔作品集」ほか全11冊（劉恒、莫言、史鉄生等）が刊行予定。

テレビドラマ「請拨315」。魏人、蘇雷と共同執筆。「編集部的故事」の続編。撮影中。

映画「無人喝彩」クランクアップ。監督夏剛、主演謝園。

映画「太陽燦爛的日子（原作：動物狂猛）」監督・主演姜文。姜文は子供の頃、王朔の家に近いあたりに住んでおり、「動物狂猛」を読むとすぐに王朔に電話したという。制作中。

馮小剛と喜劇「好夢献給你」を共同で執筆中。

張藝謀が「我是你爸爸」の映画化を予定。

